草原を拓く柔の道

近年、多くの力士を輩出しているモンゴルでは、格闘技が人気のスポーツだ。日本のお家芸・柔道の人気も高いが、その背景には長年にわたる交流があった。

写真（13ページの稽古の写真を除く）＝関 健作（写真家）

from Mongolia
モンゴル

モンゴルの英雄となったツァガンバータル選手。日本選手と戦って引けを取らない技術は、青年海外協力隊から学んだ

蒼穹（そうきゅう）の国の英雄 支えたのは日本の青年

ハシバータル・ツァガンバータル選手はモンゴルの英雄だ。2005年のアジア柔道選手権、06年のアジア大会で優勝。09年には世界選手権も制した。現在、モンゴルの柔道ナショナルチームコーチを務める彼の写真は、モンゴル中の学校の体育館に飾られている。

ツァガンバータル選手が04年のアテネ五輪に出場したとき、ウランバートルからその姿を見守っていた日本人がいた。青年海外協力隊員として派遣された、堀田篤さんだ。堀田さんは小学校5年生で柔道を始め、大学まで選手として活躍してきた。大学卒業後、柔道に関わり続ける道を考えたとき、試合で海外を訪れた経験や、協力隊OBだった高校の先生を思い出して、協力隊への参加を決めたという。

派遣先はモンゴルのナショナルチーム育成を行う柔道連盟。「最初の稽古の日は、モンゴルの選手に投げられたら帰国するという覚悟で向かいました」と堀田さんは振り返った。「自分より弱い相手に教えられたくはないだろうと思ったのです」

堀田さんが秘めていた覚悟を、ツァガンバータル選手は知らなかったという。それでも、「彼は、いつでも選手たちと共に稽古できるように努力を重ねていました。決して負けないという覚悟は、私たちにも分かりましたよ」と答えた。

堀田さんから見て、モンゴルの選手にはモンゴル相撲に通じる力強さや〝固さ〟があるという。一方、堀田さんが考える日本の柔道は、〝柔よく剛を制す〟。モンゴルの選手の力を底上げするには、当時彼らが苦手としていた寝技などの技術面を強化することが重要と考えた。「相手の力を利用して少しの力で投げるのが、柔道の技の面白いところです。モンゴル人選手の力強さと、日本柔道の技が融合すれば、とても強くなると思いました」と堀田さんは語る。

共に鍛え、技を磨く 幾多のメダルが成果に

アテネ五輪で銅メダルを獲得したツァガンバータル選手に、さらなる技術を指導したのが、09年からこの国で活動した小倉大輝さんだ。堀田さんから日本の柔道の基礎を学び、小倉さんから新しい技術を学んだツァガンバータル選手は、「国際大会では、伝統ある日本の選手はやはり高い壁です。私は寝技の技術を学ぶことで、日本選手に負けにくくなったと思います」と語った。

小倉さんは柔道国体選手の父を持ち、4歳で柔道を始めた。大学4年の全国大会前に骨折し、不完全燃焼に終わった小倉さん。「柔道で世界に貢献し、なおかつ自分自身を磨くために、軽量級柔道の強さで名高いモンゴルを任地に選んだ。

モンゴルの選手たちは幼い頃から乗馬やモンゴル相撲で鍛えられ、国自体が高地にあることから

アマルトゥブシン選手（右）が挑む60kg級は、モンゴル選手が世界上位10人中4人を占めるお家芸の階級で、代表争いもひときわ激しい

ブンドマー選手（左）も現在、リオ五輪を目指す選手の一人だ。国内選考を前に、練習にも気合が入る

国のトップ選手が鍛錬を重ねるウランバートルのスポーツ宮殿。柔道場には、毎日100人近くの選手が集まり、汗を流す

星山さん（右）は子どもたちに寝技なども教えている。投げ技などの派手な技が好まれるモンゴルで、寝技の技術は一目置かれるという

心肺能力も高い。小倉さんは選手たちと共に自らを鍛えつつ、寝技の指導やルール改正に応じた技術の更新などを積極的に行った。代表チームの国際大会にも数多く帯同。09年のパリ世界ジュニア選手権では、チームが予約したホテルが全てキャンセルされるというトラブルに見舞われたが、ダワードルジ・トゥムフレグ選手が銀メダルを獲得して喜びを分かち合った。

そんな小倉さんのモンゴルでの教え子兼打ち込みパートナーだったのが、13年にリオデジャネイロの世界選手権で銀メダルを獲得したダシダワー・アマルトゥブシン選手。トゥムフレグ選手と同じ60kg以下級で、大舞台にはなかなか上がれなかったが、毎日満員のバスに乗って稽古に通ってきた努力家だ。「稽古を始めた頃は、自分が世界大会に出られるとは思いませんでした。全ては小倉さんとの日々の鍛錬のおかげです」というアマルトゥブシン選手。世界選手権の銀メダルや国民栄誉賞の受賞時も、国際電話で小倉さんに連絡したという。

「アマルトゥブシン選手と小倉さんはいつも一緒に稽古していて、本当に仲の良い親友でした」と語るのは、自らも堀田さんや小倉さんに指導を受け、06年と10年のアジア大会銀メダルなどの記録を持つムンフバータル・ブンドマー選手だ。女の子には珍しく、小さい頃から男の子に混じってモンゴル相撲を楽しんでいたブンドマー選手は、中学で柔道を始め、高校卒業時に女性選手でも活躍できる柔道を続けることを選んだ。「日本の指導者は、ただ見ているだけでなく、選手と一緒に技の掛け方や対策などを教えてくれます。二人のおかげで、新しい技もたくさん身に付けることができました」というブンドマー選手。他の選手たちと共に、リオ五輪でのメダルを目指している。

一方、祖国を離れて日本を目指した若者たちもいる。今年の全国高等学校柔道選手権大会・男子団体戦で優勝した、日本体育大学荏原高等学校柔道部。放課後、部活に励む生徒たちの中に、3人のモンゴルからの留学生がいた。

星山さんがジュニアを教えるダルハンの体育館。壁にはさまざまな競技の図に並んで、民族の祭典ナーダムで行われる相撲、乗馬、弓術の壁画があった

バトエルデネ・バトガマアランさんとハンガル・オドバートルさんは、かつて小倉さんに連れられ、講道館に2週間遠征したことがある。「あの研修で自分が強くなれると実感し、ハンガルと話し合って、日本に留学したいと両親に頼んだんです」というバトエルデネさん。ハンガルさんが副将として二人抜きを決めるなど、優勝に大きく貢献した。1年後輩のガンエルデネ・オリギルさんも、「友人が活躍したのはとてもうれしい」と話す。スポーツ新聞各紙が「柔道にもモンゴル旋風」と報じた期待の3人は、日本での大学進学と、東京オリンピックへの出場を目指している。

次の世代の育成へ 受け継がれるきずな

モンゴルの柔道家たちは、自分たちの強さを聞かれて異口同音に「モンゴル相撲ゆずりの、相手の懐深くをつかんで投げる技術」と答えてくれた。堀田さんは、「その上、普通なら投げられてしまうような体勢になっても耐えたり、思いも付かない方法で技を掛けてきたりする、一筋縄ではいかない力があるんです」と語る。

こうした強さに技術が加われば、もっと強くなる。そう強調するのは、現在、モンゴル第二の都市ダルハンで柔道を教えている星山幸美さんだ。首都ウランバートルから、北に220キロ。青年海外協力隊の一員としてダルハンオール県の柔道連盟に派遣された星山さんのもとを訪れると、全国大会を目指して稽古に励む地元の若者たちと共に汗を流していた。

人助けや海外での生活に興味があった星山さんは、協力隊OBだった知人に触発されて21歳で協力隊に参加。十代を中心とした約100人のジュニア層に柔道を教えている。「ここの生徒たちは皆、柔道を楽しんでくれています。私自身が厳しい訓練を受けてきて、時にはつらいこともあったので、子どもたちには楽しみながら上手になってほしいと思っているんです」と語る星山さん。生徒たちは、「小さなミスでもすぐに見つけて、技が身に付くまで丁寧に教えてくれる」と星山さんを慕っている。星山さんも生徒たちに刺激を受け、日本に帰ったらまた試合に出たいという気持ちを新たにしている。

ダルハンからさらに西に400キロ。ロシア国境に程近い山岳観光の拠点ムルンの体育学校では、森田直也さんが朝の8時半から子どもたちの指導に当たっていた。この学校で柔道を教える初めての日本人となった森田さんは、モンゴル人選手の柔道はもともと鍛えられた力が土台にあり、技を見せるとまねるのが上手い、と教え子たちを評価する。見よう見まねで覚え、形が崩れてしまった技を、正しい形に一つ一つ直してあげる森田さん。今の目標は、間近に控えた大会で教え子が一人でも優勝してくれることだ。

男の子が多い中で、特に元気よく稽古に励む少女がいた。親戚にモンゴル相撲の三役がいるというバッツェルンさんは、幼い頃のブンドマー選手と同様、周りの男の子と一緒によくモンゴル相撲を楽しんでいるという。「私、強いと思うの。柔道を始めたのは3月からだけど、いつかはオリンピックで金メダルを取りたい」と屈託のない笑顔を見せた。

（編集部 近藤ゆふき）

森田さん（左）の指導を受けるバッツェルンさん（左から二人目）。男の子を相手に引けを取らない強さは本物だと、森田さんも一目置いている

モンゴル国内で活躍する スポーツ分野の青年海外協力隊員

柔道	体育	バレーボール
2人	4人	6人

モンゴルでの協力隊活動は柔道にとどまらない。
体育やバレーボールなども盛んだ。

（2016年6月現在）

ようやく春を迎えたモンゴルの草原を青空が覆う。「久遠の蒼穹の国」の名はモンゴルの美称でもある